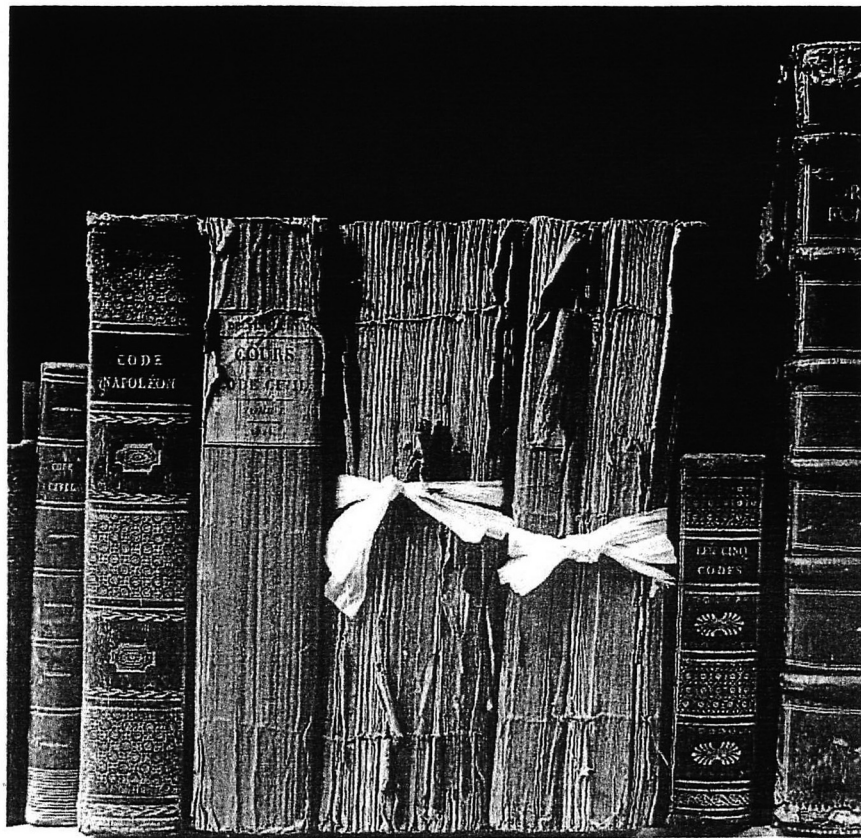


オピニオン

潮田登久子「Biblioteca一本の景色」

写・眼

読み取れる別の物語



本を写真に撮る。不思議に思う人もいるかもしれない。たしかに本は読むもので、撮るものじゃない。だけど潮田登久子(昭和15年生まれ)の作品には、大切にしたい何かが写っている。読むだけではわからない価値といえるかもしれない。

「家に1冊、きれいな本があつて、オブジェとして撮ったらどうだろうと思ったんですね」

いろいろな人の台所を訪ねて写真集「冷蔵庫」(平成8年)を刊行した潮田が、書籍を撮り始めたのは約10年前。たまたま知人が図書館長だった。協力を得て撮影を始めたが、最初は手探り状態だったという。「どう撮っていいかわからないし、貴重なものですし。さわるだけで

白い手袋が真っ茶色になったり、革が崩れ落ちたりして……異国情緒の漂う稀書、愛読のはてに背表紙が破れた古書……撮影された本はそれぞれ、肖像とか風貌と擬人化したくなるほど表情豊か。掲載作は、バラバラになつてしまわないように、紙のひもで縛つてあった洋書。

「包帯をしているみたい」に見えたという。

面白いのは写真家が本の中身を知らないこと。「これは何々の本とメモはとりませんが、いちいち勉強なんてできっこない。物体として、たまたまを写しています」

そこからは、書籍の値段や内容とは関係のない、電子化されたりもしない、別の物語がはっ

きりと読み取れる。

(篠原知存)

潮田登久子写真展「Biblioteca一本の景色」
23日まで、東京都中央区日本橋茅場町2の17の13の305、森岡書店で。モノクロ17点を展示。
入場無料、午後1～8時、日曜休。22日午後7時半、写真家本人と飯沢耕太郎氏、島尾伸三氏によるトークショー(参加費1000円、要予約)を開催。問い合わせは☎03・3249・3456。